うちらかたひ

艶陽天 II

浩然著

伊藤克敏

年出版社

艶陽天（うらかなひ）

Ⅱ

浩然著・伊藤克訳

青年出版社

訳者紹介

伊藤　克（いとう かつ）

1915年東京に生まれる。1934年淑徳高等女学校卒。1936年より1961年まで中国に在住。1955年中国作家協会瀋陽分会会員。1956年より北京人民文学出版社特約翻訳家となる。現在中国文学翻訳家として活躍。
主要訳書――鮑秀蘭というペンネームで日本語訳，陳登科『活人塘』，白朗『幸福なる明日のために』。蕭蕭のペンネームで中国語訳，『樋口一葉小説選集』，島崎藤村『夜明け前』，『徳永直選集』，『宮本百合子短篇小説集』，野間宏『真空地帯』等，帰国後，伊藤克として，呉源植『金色の山々』，胡万春『光は大地を照らす』，馬憶湘『赤軍の娘上・下』，金敬邁『欧陽海の歌上・下』，工農兵故事会編『ものがたり紅灯記』，中国青年出版社編『中国青年英雄伝Ⅰ』，高玉宝『高玉宝』，鄭加真『北大荒賛歌上』，浩然『艶陽天Ⅰ～Ⅷ』。

艶陽天（うららかなひ）　Ⅱ　　定価 980円

1973年7月15日　第1刷発行
1974年6月30日　第3刷発行

著者　浩　然
訳者　伊藤　克
発行者　福井　肇

発行所　東京都千代田区神田錦町1～4　株式会社　青年出版社
電話（291）1189　振替 東京 49658

0097-070539-3835

蕭長春（シアオチヤンチユン）　東山塢村党細胞書記・農業生産合作社主任。三十歳。党員。合作社副主任・第二生産隊長。四十五〜六歳。

韓百仲（ハンパイツオン）　俗称大足の焦二菊。韓百仲の妻。貧農四十歳あまり。

焦二菊（チアオアルジユイ）　共産主義青年団東山塢支部書記。女性、二十二歳。

焦淑紅（チアオスーホン）　共青支部組織委員。元党細胞書記焦田の息子。貧農。二十四〜五歳。

焦克礼（チアオコオリー）　共青支部教宣委員。貧農。女性。二十歳ぐらい。

馬翠清（マーチヤイチン）　翠清の恋人。二十二歳。

韓道満（ハンタオマン）　合作社飼育員。連福の父。貧農。

馬老四（マーラオシー）　五保戸。百仲の兄嫁。

五おば（ウーオラオタイ）　長春の父。貧農。六十五歳。

蕭老大（シアオラオタイ）　郷党委員会書記。三十四〜五歳。

王国忠（ワンクオツオン）　前党細胞書記・合作社副主任。五十二〜三歳。

馬之悦（マーチユエ）　元地主馬の弁髪野郎の姪。之悦の妻。四十歳あまり

馬鳳蘭（マーフオラン）　合作社会計員。二十六歳。

馬立本（マーリーベン）　俗称まわり道。第一生産隊員。中農。五十歳あまり。

馬同利（マートンリー）　俗称馬の弁髪野郎。元地主。

馬地主（マーツアイ）　俗称六本指の馬斎。立本の父。元富農。六十歳ぐらい。

馬斎（マーリエンフ）　俗称あばた。第一生産隊長。貧農。三十二〜三歳。

馬連福（マーリエンシヨン）　俗称馬大砲。第一生産隊員。中農。四十歳ぐらい。

馬連升（マーフアイ）　下層中農。四十一〜二歳。

馬子懐

焦振茂（チアオチェンマオ）　淑紅の父。下層中農。六十歳。
焦振鑾（チアオチェンフォン）　合作社輸送員。振茂の従弟。下層中農。五十歳ぐらい。
韓百安（ハンバイアン）　ベテラン農民。下層中農。道満の父。六十歳あまり。
孫桂英（スンクイイン）　連福の妻。二十七～八歳。
守門虎（チアオ）　連升の妻の俗称。四十三歳。
焦慶（チアオ）　二菊の弟。貧農。三十五～六歳。
範占山（ファンシェンシャン）　之悦の友人。商人。元日本軍炊事員。
韓小楽（ハンシャオロー）　共青団員。副業係。元合作社会計員。
韓百旺（ハンバイワン）　合作社副業係。百仲のまた従弟。五十歳ぐらい。
馬同峰（マートンフォン）　党員。
韓徳大（ハンドーダー）　家畜飼育員。二十歳あまり。百旺の甥。
石坊（チェンファンチェン）　長春の息子。六歳。
陳玉珍（チェンユイチェン）　克礼の妻。二十歳ぐらい。
馬立新（マーリーシン）　馬の弁髪野郎の息子。
韓百悼（ハンバイダオ）　元東山塢党細胞班キャップ。百仲の兄。抗日戦争の時犠牲になる。
李世丹（リーシーダン）　郷長。元区長。
焦田（チアオティエン）　元東山塢党細胞書記。
啞　家畜飼育員。貧農。四十歳ぐらい。

その他

焦慶の妻（三十八～九歳）。馬子懐の妻（四十六～七歳）。韓春（ハンチュン）（党員）。志泉（ツーチュン）の嫁（長春の従姉）。郷党委員会武装隊長。婦人部長。古安の嫁。保管員（党員）。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

第Ⅱ巻目次

第十七章……272
第十八章……284
第十九章……305
第二十章……321
第二十一章……334
第二十二章……352
第二十三章……365
第二十四章……381
第二十五章……399
第二十六章……416
第二十七章……439
第二十八章……456
第二十九章……470
第三十章……486
第三十一章……500
第三十二章……516

第十七章

蕭老大は、今日の午前ちゅう、とてもご気嫌だった。息子が帰って来た。それに、麦はやはり労働をもとにして分配するという。嬉しいことばかりだ！

息子がじぶんのたよりを手にしてすぐに村へ戻って来てくれた、ということは、聞くまでもなく、あの縁談に乗気になったからだ。麦刈りまえの手のすいているときをねらって、いち早く話をまとめ、麦の分配が終ってから家の手入れをし、布団を二人分と服をなん着か新調し、吉日を選んで嫁を迎える。嫁さえ迎えれば、この年寄りも肩の重荷がおりるというものだ！

昼まえに、かれは野菜畑で息子が帰って来ると溝北のあの騒ぎたてている連中もおとなしくなり、土地に配当をだす話もたち消えになったという噂を耳にした。蕭家は土地が少なく労働日（訳注　合作社の仕事をした日数）が多いい。息子は昼夜わかたず働いているし、じぶんも冬の農閑期をのぞいては一年三季、野菜畑で忙しく動きまわっている。労働にもとづいて麦をわけてもらえるとすれば、あらたにもうひとりぶんの口がふえたとしても、一家四人くったり着たりするのに困ることはない。

このふたつの蕭老人を喜ばせるしらせは、馬翠清が義理の母親の五おばに伝え、五おばがかれに話して聞かせたのだった。正午近く、蕭老大は野菜畑から家にかけ戻って、息子に心をこめた昼飯を用意してやろうと仕度にとりかかった。ところが、きかん坊の孫の石坊がぐずってどうしても飯を炊かせない。父親に会いに連れていけといってきかないのだ。

蕭老大が柴をかかえてくると、孫は門に立ちはだかって中へいれない、蕭老大が水をいれようとすると、孫は鍋蓋をおさえてあけさせない。仕方なくじいさんは石坊をなだめすかした。

「いい子じゃな、今日はじいちゃんのいうことをお聞き。じいちゃんが飯を炊き終えたら、おまえのとうちゃんはすぐ戻って来るんじゃよ」

だが石坊は小さな頭をたてつづけに横にふる。
「いやだい、いやだい。とうちゃんとこに連れていっておくれよう。とうちゃんはまたいっちまうからさあ！」
「いきやしない。家にも戻らんで、どうしてまたいっちまうことがある！」
「いっちまうさ。このまえだってそうじゃないか」
石坊は今年六つになる。きびきびとして活発な、とても利発な子供で、なんでも話がわかる。端正な眼鼻だちは父親の蕭長春と瓜ふたつだ。蕭家にこのひと粒種子がいることは、家庭をあかるくにぎやかにし、親子はこの石坊を宝のように大切にしていた。じぶんたちがつらい目、苦しい目を見ても、石坊にだけはくうもの、着るもの、なにひとつ不自由をさせなかった。このために石坊は甘えん坊になり、すぐにごねだし、とくに祖父に対してひどく、ちょっとでもいうことを聞いてやらないとさからい、それでも駄目となると泣きの一手で脅迫する。その泣きかたも、大声あげてわめいたり、ののしったりするのではなく、黙って大粒の涙をぽろ、ぽろこぼすのだ。可愛想でとても見ていられない。
いまも、石坊は祖父のももに抱きついて地団太踏んでごねている。
「いこうよう、いこうったら。とうちゃん迎えにいこうったら」
蕭老大は立腹したふりをした。
「騒ぐでねえ、騒ぐとじいちゃんはおまえの尻をぶったたくぞ！」
「騒ぐさ、もっと騒いでやる！」
「ほんとうにぶつぞ。じいちゃんは本気だぞ！」
石坊は祖父がげんこつをふりあげたのを見ると、小さな眼玉をぱちくりさせ、大粒の涙を両眼に浮かべた。
じいさんがいちばん弱いのはこれで、あわててふりあげたげんこつをおろし、孫の涙を拭いてやると、なだめすかした。
「泣くじゃねえ。迎えにいけばいいんじゃろうが！」
この年寄りと幼い男の子は、最初に合作社の事務所へいったが、そこで出会ったのは馬連福、馬立本、馬鳳蘭の三人がこそこそなにか相談している場面で、蕭長春はいなかった。つづいて廟へいって見ると、焦振茂と韓百安が大工仕事をしており、蕭長春は一度は顔を見せにたちよったが、ふたこと、みこと話を交しただけでたち去

ったという。
通りという通りを歩き、村じゅう捜しまわっても、蕭長春にいきあたらない。蕭老人はついに頭にきた。孫の手をひっぱって道を戻りながら、ぶつぶつ息子をののしりだした。
「おめえは家のことなんかちっとも気にかけていねえんだ。おれたち年寄りのことも子供のことも、おめえの心にはこれっぽっちもねえんだ。おめえは山寺の生臭さ坊主よ、廟のインチキ道士よ、お布施もらいの尼さんよ！おめえは……」
じいさんのぼやく声がだんだん大きくなってきたので、びっくりした石坊が眼玉をぱちくりさせて見あげている。
通りで、蕭老大は仕事を終えて戻って来る韓百仲に出会った。それでおしとどめて、
「百仲よ、おれんちの、あの大書記を見かけなかったけえ？」
と聞いてみた。
「いま畑から戻っていったところだ、家に帰ったんじゃねえですかい？」
と韓百仲がこたえた。
「家になんぞいやしねえ！」蕭老人はそういうと、孫の手をひっぱった。頭がかっかしていた。「おめえがかけくたびれて腹ぺこになっても、飯の面倒見てくれる者は他にはいるめえ？　とどのつまりは家のしきいをまたがにゃなるめえ？　今日という今日はほんとうのことをいってくれるぞ、声を大きくしていってくれるぞ、こんな暮らしは、おめえにはよくても、おれにはもう我慢がならんねえんだ！」
ふたりが家の門をくぐると、石坊は年寄りの手をふりきって、とびはねながら中へ向かってかけだした。
「とうちゃん！　とうちゃん！　ほんとうに帰って来たんだね！」
そのときになってはじめて、蕭老大は息子がすでに戻って来ていて、ちょうど柴を抱えて院子から部屋の中へはいっていくところなのを見た。
蕭長春は苗圃から戻る途中で、馬立本が入団したいと要求していることについて焦克礼と話しあい、少し手間どってしまったので、家に向かったときには飢えと疲れで眼がくらみ、腹がぐうぐう鳴って、頭がふらふらして

いた。ところが家に戻って見ると人影はなく、鍋は冷たく茶簞笥の中は空っぽだ。半日忙しく仕事をして家に戻って来た者が、手足を洗ったあとすぐに、ぽかぽか湯気のたつ飯にありつけたなら、どんなに快適なことだろう！　残念なことには、蕭長春は三年このかたそんな思いをしたことがない。蕭老大がいうように、一家三人ちょんがーばかり、女っ気のない暮らしはまったく楽ではない。外を無我夢中でかけずりまわっているときには、蕭長春の頭にそんな考えが浮かぶことは毛頭ないのだが、仕事を終えてくたくたになって家に戻って来たとき、じぶんの生活の中になにか欠けているものがあるのを身にしみて感じるのだ。部屋の中にひとつたりないものがある、愛情と暖かさが不足している、じぶんと家事を分担してくれる伴侶がいないのだ。

この若いひとり者は、緊張した闘争の間隙で、ふっと生活の伴侶のことを頭に浮かべたのだ！　かれはほんとうに、すぐさま妻を娶りたかった。嫁いでくるなりすぐにかれの片腕になり、すぐにかれの心のよりどころになり、かれを身も心も軽やかに、外へ仕事にいかせてくれる、そういう妻が欲しかった……かれは考えた。じぶんもだんだん年をとる。せかなければ似あいの相手はますます捜しにくくなる。父親もだんだん年をとり、これ以上、外では男、家に戻れば女の仕事を兼ねさせるのは気の毒だ。それに息子、息子ももうすぐ学校だ。かまってくれたり、可愛がってくれたりする母親がいず、ひとりぼっちで学校へいき、帰って来ても迎えてくれる者がいないような思いをさせるのは申しわけがない……ああ、どんな相手を捜したらいいのだろう？　じぶんと気があい、年寄りにも子供にもよくしてくれる女性なんて、とても無理な要求だ！　思想の遅れたのは困るし、そうかといって進歩的な女性を迎えたとしたら、三人の面倒を見てもらうために家の中にしばりつけてしまう結果となり、かの女自身が外の活動ができなくなってしまうだろう？　それに、そういう女性はどこにいる？　いたとしても、双方で気にいるなんて、そんなうまい話がころがっているわけがないじゃないか！……

蕭長春はあれこれ考えながら、家の内外を掃除し終えると、院子から柴を抱えて来て、飯を炊く仕度にとりかかった。そのとき石坊の叫ぶ声を耳にしたので、ふり返って見ると息子が蝶のようにとんで来た。かれは腕の柴

を地面へ投げだし、その手で息子を抱きかかえ、頭の上までもちあげた。そして下へおろすとまたもや抱きしめて、息子のやわらかい頬になんどもキスをしてやった。胸いっぱいに熱いものがひろがって、のど元にまでこみあげてきた。

鉄の柱のように強い若者も、しばしは肉親の愛と幼い者に対する感傷にひたったまま、ときのたつのを忘れていた。

「石坊、とうちゃんのことを思っていたかい？」

「思っていたさ。とっても、とっても思っていたんだよ！」

「とうちゃんも、おまえのことを思っていたぞ」

「じゃあ、どうして家に帰って来ないんだい？」

「とうちゃんは忙しいんだ！」

「よそんちのとうちゃんは忙しくないのに、おれのとうちゃんだけが忙しいのかい？」

蕭長春は思わず笑いだした。

蕭老大は大きく鼻をならすと、地面に投げだしてある柴を抱えあげ、怒りを顔にだして大またで部屋の中へはいっていった。

蕭長春も石坊を抱いてそのあとを追った。

蕭老大はどさっと柴をかまどのまえに投げだすと、ぱたぱた服のほこりをはたきながら、怒った顔で息子を詰問した。

「おめえに聞きてえことがある。この家はもういらねえとでもいう気か？」

蕭長春は笑って父親の顔を見た。

「なにいいだすんだよ、この家がいらないなんて。このおれに他に家があるとでもいうのかね、他にだれかいるとでも思うのかね？」

このひとことは年寄りの心をやわらげ、怒りを静め、蕭老大はこれ以上怒っていることができなくなってしまった。そのとおりだ、息子は他にだれがいる？　父親としてのこのじぶんの他には、子供がひとりいるだけではないか。それに、子供をあんなに愛している、まるでじぶんがかれを愛しているように。ただ、仕事が多すぎて暇がない、肩の重荷が多すぎるのだ。やっぱり叱言をいうのはやめにしよう。家に帰って来たときぐらい気を休ませてやるべきだ。そう思ったじいさんは口調をやわらげて、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

「おめえのそのようすを見ると、この家なんかいらねえようだからな」
とだけいって終りにした。
蕭長春は石坊を下におろすと、ひさごの杓子で鍋に水をたしながら、笑って問い返した。
「おかしなことばかりいうじゃねえか。じゃあ、どんなようすが家のいるようなようすなんだい？」
蕭老大は東側の部屋のしきいに腰をおろして、きせるに刻みをつめこみながら、
「人さまがよくいうじゃねえか、家庭、家庭って、人間は家庭がちゃんとすれば心身ともにおちついて、ゆったりできるものよ。ところが、おめえは一日じゅう外をかけずりまわって、家を顧りみる気がなく、頭からとっぷり仕事につかっている、おかげで家庭は目茶苦茶よ」
蕭長春は腰をまげて柴をかまどのたき口につっこんで、マッチをすりながら、
「古い諺なんかひきあいにださずに、少しは新らしい道理をいったらどうなんだ。じぶんの家庭ばかり顧りみるのを個人主義っていうんだよ」
そういいながら、じぶんでもおかしくなってきた。ときには、個人の問題もじぶんの頭に浮かぶことがある。ただ、懸命におさえつけ、追いはらい、頭を占領されないようにしているだけだ！
蕭老大がいい返した。
「新らしい道理だろうと、古い理くつだろうと、こうしなくちゃならねえっちゅうことは、その通りにやらにゃあならんのよ。おめえに聞くが、また工事場に戻るつもりか？」
蕭長春は火のついた柴をかまどのたき口へつっこみながら、父親にこたえた。
「麦の分配をおえたら戻る」
「戻らんでくれ。南村のあの家と約束ずみなんじゃ。市がたつ日に、おめえらは市で会うことになっている。おめえの二菊おばの話によると、申しぶんのねえ人柄のようだ。おれも市にいったときに直接南村の者に聞いてみた。ただ、おれがいいといっても、おめえの眼にかなわなくちゃ駄目だ。おれの考えでは、そう悪くなければ迎えたらいい、こういうことは選べば選ぶほど眼移りするもんだ。おれたちは百姓一家だ、花のようなおな子を迎えて飾っておくわけじゃあるめえし、天女のような器量

よしでも、心がけが悪けりゃなにもならん。まじめな人柄で、おめえと気があい、石坊をいじめなければ、それでいいじゃねえか。嫁をもらってしまえば、おめえが工事場に戻ろうが、どうしようが、おれは干渉なんぞしねえ！」

「もう少しまってくれ。こんなに忙しいのに、そんなことにかまけてる時間なんぞないんだよ！」

蕭老大はまたもや頭にきた。きせるのがん首を力まかせにしきいにたたきつけながら、

「じゃあ、なんにならかまけてる時間があるっちゅうんだ？　はっきりいってみろ。なんといおうとも、今度という今度は、おめえに選りどのみはさせねえから。この話をぶち壊したら、このおれはおめえと決着をつけるから覚悟していろよ！」

柴はなかなか燃えあがらず、かまどのたき口からはもうもうと煙が吐きだしている。柴が乾いていないのか、煙突がつまってでもいるのだろう。蕭長春はしきりに火を吹きながら、

「そうせきなさんなったら。そういうことはなんていっても、てえして重要なことじゃねえんだから」

「じゃあ、ごく重要っちゅうのはどんなことなんだ？おれのためではなく、石坊のためにも、おめえは早く嫁を娶るべきだ。この石坊は、家にいても外へいっても、いつもひとりぼっち、おれが平気で見ていられるとでも思うのか？」

そういいながら、蕭老大はじぶんの言葉につまされて思わず眼のふちを赤くした。それであわてて手の甲でこすった。

蕭長春がいった。

「おれたちは頭を高くもたげて眼を遠くに放つべきだ。おとっつあんのためにも、石坊のためにも、おれ自身のためにも、みなの衆のためにも、いま、この大切なときに、おれはおれの心のぜんぶを農業合作社に棒げるべきなんだ……」

父と子の心はひとつにならず、話も平行線をたどるばかり。

蕭老大の心をいま占めているのは、じぶんのこの家のことだけだ、この家をゆたかにさせ、しあわせな楽しい毎日が送れるように、そればかりを望んでいる。かれはいまのこの時世はすばらしい、合作社は完全にじぶんの

心にかなっていると思っていた。ただ、息子がじぶんとひとつの心になってくれないのだ。

蕭長春の心をいま占めているのは、やはりこの家のことだった。だが、かれが思っているのは昔のあの苦しい時代のことだった。かれはじぶんの家から五おばの家、馬老四の家、それに向かいの焦振茂の家のことまで考えた。これらの家は、もしも旧社会だったら、もしも単干の時代だったら、いったいどういう暮らしをしていただろう？　かれらは、みな、集団化から離れられない、離れたら生活していくことができないし、かれらのそれぞれの才能を発揮することなぞ思いもよらないのだ。力をそそいで合作社を発展させるべきだ、社会主義を最後までやり通すべきだ、心をぜんぶこのために捧げるべきだ、他のことは考える必要はないのだ。党の指導と、社員たちのやる気さえあれば、じぶんの理想はかならず実現するのだ。うしろへ足をひっぱるような奴がいたら、このおれが断固として払いのけてやる！

蕭長春は心であれこれ考えながら、手足を忙しく働かせていた。粟を洗ったり、野菜をきったり、そのあいまにはかまどの火も見なければならない。いくら蕭長春でも台所仕事はかれの得意ではなかった、慣れぬ手つきでもたついているうちに、しまいには家の中から院子まで煙だらけになってしまった。

蕭老大は咳こみ、石坊も外へ逃げだしながら、むせてぜい、ぜいいっている。

その情景を、向かい側から一部始終見ていたのが焦淑紅である。裏門の門柱によりかかって眺めていたかの女は、もうこれ以上黙って見ていられず、部屋にひき返すと新らしい茶碗にご飯を山盛りにし、その上にお菜をのせて戻って来た。

そして裏の院子から通りに出ると、向かい側の蕭家の丸太の門をくぐって呼んだ。

「石坊、石坊！」

煙の中から石坊がとびだして来た。かれは小さな両手をたたきながら叫んだ。

「とうちゃんが帰って来たんだよ。淑紅ねえちゃん！」

焦淑紅は茶碗を石坊の手にもたせてやった。

「さあ、おたべ。そして、いい子だから、これからわたしを二度とねえちゃんと呼ばないのよ」

石坊は茶碗をうけとりながら、眼をぱちくりさせた。

「じゃ、なんて呼ぶの？」
「おばさんって、わかった？」
石坊はうなずいた。
「うん、いいよ」
「じゃあ、呼んで聞かせて」
石坊は、小さな唇を動かすと、すきとおった声で呼んだ。
「おばちゃん！」
焦淑紅は「はあい」とこたえると、腰をかがめてその頬にキスをした。かの女はこの男の子を愛していた。その愛情は哀れみから出たものだけではなく、この子と一緒にいると知らず知らずのうちに肉親に対するような感情が、かの女の心の奥底から湧きだしてくるのだった。
蕭長春は、すでに粟を鍋の中にいれていた。強い火が必要だというのに、かまどの火がまた消えてしまった。かれは火箸で柴をもちあげ、懸命に吹いた。だが、吹けば吹くほど柴はくすぶるばかりだ。
焦淑紅はかけよると蕭長春の手から火箸をとりあげ、かまどのたき口につまっている柴をぜんぶとりだした。中の灰を火箸でかきまわし、ふたたび柴を中にいれ、軽くひと吹きすると、柴はぱうーと音をたてて燃えあがった。
蕭長春は思わず笑って、焦淑紅に火箸をくれといった。
「ようし、おれがやる」
そばに立って眺めていた蕭老大も口をそえた。
「こいつにやらせておいたらいいんじゃよ」
だが、焦淑紅は返事もせず、火箸を蕭長春に返そうともせずに、無言のまま柴を折ってはかまどのたき口にくべていた。
柴は勢いよく燃えあがり、ぱちぱちと火の子をはじき、めらめらと舌をのばしてかまどのたき口をなめた。まっ赤な炎は娘の真剣なおももちと、ときめく胸を熱くほてらせていた。
またたくまに、鍋の水は煮えたった。焦淑紅は立ちあがると、鍋の蓋をあけ、ぐつぐつ泡だっている水を吹いて水かげんをたしかめ、また蓋をとじた。その上に鉢を伏せて重しにすると、ふきんで蓋のまわりを囲い、湯気が外にもれないようにした。それから、炒め鍋をきれいに洗い、また火をたくと、鍋に油をいれた。あっという

まに、まるで手品を使ったように鍋いっぱいの野菜が炒めあがった。お菜ができあがったときには、飯もむれていた。炒めた野菜と粟飯のかんばしい薫りが、えがらっぽい煙のにおいを追いはらった。

焦淑紅はまず蕭老大に一膳盛ってやり、つづいて蕭長春に盛ってやると、はじめてひと息ついた。手の甲で顔の汗をぬぐいながら、かの女は注意深く蕭長春の顔を盗み見た。なんだか、はっきり見えない、それでもう一度、眼をこらして見た。なんらかの表情を相手の顔から読みとろうとしたのだが、読みとれなかった。ひと眼見ただけでしたしみを感じ、力と自信をあたえてくれるその顔は、汗の玉をにじませ、黒いすすをつけているほかには、あせりや弱気のかげりの片鱗もなく、党細胞書記は依然として、いつものように温和な、いつものように平静な表情を浮かべているのだ。それは焦淑紅には驚きだった、かの女の心は思わず動いた。

蕭長春は飯をひと口かっこむと、冗談めいた口ぶりで焦淑紅にいった。

「へい、うまいなあ。おまえの腕はたいしたもんだ！労働に応じて分配するのが合作社のきまりだ、おまえもここで一緒にたべないか」

だが焦淑紅はぼんやりと手にもった茶碗を見つめたまま、言葉が出てこなかった。

腹がすきすぎている蕭長春は、しきいに腰をおろしたまま大口で飯をかっこんでいた。さもうまそうに次第にピッチをあげている。

焦淑紅は視線を掃除のゆきとどかない部屋の内外にはしらせていたが、その視線はふたたび、かたわらにいる年寄りと子どもに向けられた。とたんに、かの女は胸が苦しくなってきて、思わずいった。

「ああ、蕭書記、あんたの暮らしは苦しすぎるわ！」

蕭長春は顔をあげると、おちついた声で聞き返した。

「なに、苦しすぎる？」

焦淑紅は感情のたかぶるままに強くうなずいた。

「見たらわかるでしょう。工事場から戻って来ると、ちょっとの休むまもなく忙しく動きまわり、家の門をくぐるとまた煙にむせながら食事の仕度……」

蕭長春がさえぎった。

「柴も粟も手のとどくところにある。手さえ動かせば飯が炊ける。うまく炊ければうまい飯をくい、まずく炊け

ればまずい飯をくう。どっちにしても腹はくちくなる。それ以上なにを望むのかね！ 淑紅、おまえは苦しいとはどんなものか知っているのかね？」

そのそばから蕭老大が、なかば冗談、なかば不平を託して口をはさんだ。

「苦しいもんかよ、しあわせいっぺえなのよ！ 淑紅、聞いたことがあるかい、おめえの長春おじさんはな、こういう暮らしは、暮らせば暮らすほどやる気がでてくるんだとよ！」

そういうとじいさんは、じぶんから吹きだして飯粒をあたりにまき散らした。

蕭長春は箸で軽く茶碗の底をつつきながら、言葉をつづけた。

「こういう暮らしができて、やる気をなくすというのなら、どんな暮らしだったら、やる気を起こすというのだね？ おれは七つの年から乞食をして、大雪の日に二本の足をまっ赤に凍らせ、ひと足歩いてはさすりながら、やっと他人の門口に立ち、そのあげくには追っぱらわれたものだった。やっとのことでお粥を小桶に半分めぐんでもらい、馬の弁髪野郎の家のまえを通りかかったら、中から小牛ほどの大きさもある黄色い犬がとびだして来て、おれのズボンをひきさき、凍えた足に咬みつき、粥のはいった桶をひっくり返してしまった。おれは生命も顧りみずに、地べたに這って粥をなめた……」

その言葉は針のように焦淑紅の心をつき刺した、かの女は思わず眼のふちを赤くすると、力いっぱい石坊を抱きしめた。

焦老大も感慨深そうに言葉をはさんだ。

「あのころに比べたら、いまの暮らしに満足しなけりゃなんめえなあ。いまの暮らしのほうが、よっぽどしあわせだ……」

「いまの暮らしも楽とはいえねえ。だが苦しい中にもしあわせがある。力をゆるめずに歯をくいしばってやりぬいて、この苦しみを乗りきり、農業合作社をしっかりと発展させれば、そのときこそは、ほんとうにしあわせになれるのだ。淑紅、おれのこの言葉をどう思う？」

書記の言葉はさして多くはなかったが、娘の心にはその一字一句がしみこんでいた。

蕭老大はからの茶碗をかまどに運ぶと、げっぷをしながら身体の土ほこりをはたき、また一服つけだした。白

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook